

# 心理学 ミュージアム



法政大学文学部心理学科 教授  
**吉村浩一**

Profile—よしむら ひろかず  
京都大学大学院教育学研究科教育方法学専攻博士課程満期退学。京都大学教養部助手、金沢大学文学部講師、助教授、明星大学人文学部教授を経て、2003年より現職。専門は知覚・認知心理学。著書は『運動現象のタキソノミー』、『逆さめがねの左右学』（いずれもナカニシヤ出版）。

## 安藤研究所という名の会社



写真1 法政大学で保管している安藤研究所製の2製品（ともに社名プレートが貼られている）

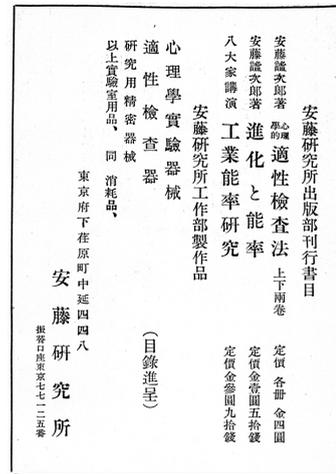


写真3 安藤謙次郎著『進化と能率』（1924年の安藤研究所発行版）に掲載されている安藤研究所の広告



写真2 新潟大学に残る安藤研究所のランシュブルグの記憶検査器（カバーを外したところ）

第二次大戦頃までに輸入された心理学実験機器は、心理学古典的実験機器の代表格と言えますが、日本にはそれらをもとに模造品や改良品を作っていた会社が4社ありました。島津製作所、山越工作所、竹井製作所（現竹井機器工業株式会社）、それに安藤研究所です。安藤研究所を除く3社は、カタログ情報などに裏づけられてかなり実態がつかめてきましたが、安藤研究所については残された資料が少なく、実態がよくわかりませんでした。

安藤研究所を興した「安藤謚次郎」は、変わった経歴の持ち主で、大正時代は海軍軍人で、そのころからさまざまな心理学関連機器を作っていました。軍人の身分なので、自らが特許や新案登録をもつ18種の適性検査機器の製造販売を山越工作所に託していました。安藤はまた、竹井製作所の創設にも一役買っていました。竹井機器工業の現会長竹井昭雄氏にお聞きしたところによると、創業者である父・竹井七郎氏は、安藤研究所で2、3年間、心理学の適性検査器の使い方などをみっちり仕込まれ、昭和2年に独立し竹井製作所を興したそうです。機器の設計担当者も世話してもらっていたようです。

安藤は、若くして海軍をやめ安藤研究所を興し、心理学実験器械の製造販売に本腰を入れます。大正13（1924）年のことです。こう話すと、今流のやり手起業家の元祖のように思われかねませんが、16歳を頭に5人の子どもたちを残し48歳で急逝した彼への『心理学研究』誌上での追悼文（1932, pp.492-496）を読むと、人物像が一変します。「[安藤]研究所の経営の内容については多少相談を受けた私としては同中佐の苦心をよく知っており、その苦心が同中佐の死期を早からしめ、ああ中道にして倒れられたという感を深く感ずる」（田中寛一）、「開拓者としての苦しみに比し、酬いられる所の甚だ少なかった事をお気の毒に思う」（増田惟茂）、「軍人としての安藤さんは、或いは成功者と言えなかったかもしれない。性格も、風采も軍人らしくなかった」（川島鹿蔵）。

ところで、彼の名前なのですが、「謚」の字は、「静謚」という熟語があることから「ヒツ」と読めそうですが、他の読み方も広がっています。資料を探してみると、「いつじろう」「やすじろう」との読みが出てきました。大泉溥（編）の『日本心理学者事典』（2003）では「いつじろう」とあります。大泉先生に問い合わせたところ、典拠として「日本心理学者名簿 昭和十年」（日本応用心理学会編）の「逝去者の部」のコピーを送っていただきました。そこには「ANDÔ Ituzirô」とあります。本人が学会に届け出た読み方でしょうから、確度の高い情報です。しかし、国立国会図書館典拠データ検索・提供サービスでは、「ヒツジロウ」とありました。この読み方に確信がもてたのは、所属していた海軍名簿の記載です。「海軍高等武官名簿（大正九年一月一日調）」の少佐の項（91ページ）に「ヒツジラウ」のルビを見つけました。

安藤研究所の製造品は、会社の存続期間が短かった（1924.11～1932.4）割にはかなり現存しています。新潟大学（旧制新潟高等学校）が最も多く13点、京都大学に5点、東北大学に3点、東京大学と文教大学に1点ずつ確認しています。最近、ある大学の心理学研究室が古い機器を廃棄すると聞き、急いで駆けつけ2点の安藤製品をもらい受けました（写真1）。1点はスメッドレー式握力計ですが、もう1点はフレームしか残っておらず、なんだかよくわかりません。振り子型測時計なのかもしれませんが、ほかでは見たことのないタイプです。安藤研究所の製品には欧米の模造品でない独自製品がかなりあります。

現存している安藤研究所の製造品を見渡すと、安藤の原点とも言える適性を測るための性能検査器と心理学実験用機器に大別できます。法政大学の握力計は前者に属し、振り子型測時計は後者と言えるでしょう。写真2に示した「ランシュブルグ式記憶学習装置」は両者の中間的なもので、これ自身は後者に属しますが、のちにこれの簡易版を山越工作所と島津製作所が製造して「性能検査器械」として売り出しています。そのことを考えれば、前者の性格ももっています。両者を分けて整理することは思いの外、有意義です。性能検査に用いる機器類は、日本の4社が心理学の枠を超えた需要を見込んで積極的に製造しています。当時、性能検査は職業適性や個性を科学的に捉える道具と位置づけられていたようです。

写真3は、安藤の著書『進化と能率』の巻末に掲載されている安藤研究所の広告で、「目録進呈」とあります。はたして、目録が作られていたのはすぐ上の「適性検査器」のみだったのか、それとも「心理学実験器械」の目録も存在するのか、この書き方からは判然としませんが、現在のところ、「心理学実験器械目録」は見つかっていません。